

こっか
ぼうえい
国家防衛
のために

—精選「民間防衛」—

—正道

SEIDOU

目次

スイスの民間防衛	
普遍的な防衛指南	3
第1章 自由と独立のために	
スイスの誇り	6
国防の意識	7
第2章 目に見えない戦争	
戦争の第二のかたち	9
不景気の背景	11
敵の耳目	12
第3章 敗北主義と平和主義	
平和という口実	15
抵抗力の削減	17
戦う前からの敗北	18
騙されるな！	19
第4章 忍び寄るスパイ	
スパイの本性	22
注意喚起	23
メディアの危険性	24
持つべき気構え	25

おわりに

民間防衛と日本の現在

.....

28

スイスの民間防衛

普遍的な防衛指南

国民に配布された書

一九六九年、スイス政府は、国民に『民間防衛』という冊子を配布しました。民間防衛——その題名のとおり、民間の防衛意識を高めるための啓蒙書です。冊子と言いましたが、実質的には、日本語訳で三〇〇ページほどもある「厚い本」です。

この『民間防衛』の叙述スタイルは少し変わっています。理論的、啓蒙的な文章をベースにしながらかも、そこに度々、未来予測的な物語が挿入されるのです。理論的な部分は白い紙に印字されており、物語的な部分は、オレンジ、赤、薄緑、といったカラーページに印字されています。

そのように、たいへん特徴的なスタイルの書物ではあるのですが、逆にそこには、頑固なまでに終始一貫しているものもあります。それが「スイスは自国の独立を守る！ 敵軍などに呑み込まれてなるものか！」という気概です。

対共産主義国

一九六九年当時のスイスにとって、仮想敵国の第一はソ連でした。正確に言えばソビエト社会主義共和国連邦。共産主義を奉じる、かなり好戦的な国家です。

スパイ活動も盛んな国でしたが、ゴルバチョフの情報公開（グラスノスチ）によって国家経営の矛盾が暴露されると、国の屋台骨がもたずに、一気に崩壊してしまいました。一九九一年のことです。

では、そのようにソ連が消えたことは、「二一世紀の自由主義国の国民である私たちには、もう敵国と呼べるような国はなくなつた」ということを意味するのでしょうか。

いえ、そんなことはありません。現代にも、現に「中華人民共和国」という共産主義国家が存在しているからです。

この中国という「敵国」は、今まさに日本の領土と国民を呑み込もうとしています。日本を自分たちの植民地にして、私たちの領土を「日本自治区」にしようと画策しているのです。チベット自治区、ウイグル自治区のように。

見ればそこには耳障りのよい「自治」という言葉が使われています。自ら治める、という意味の言葉がです。

それが言葉とおりの意味を持っているならば、たいへん結構な話です。ですが実際のところは、中国のいう「自治」には、なんらマトモな意味合いは込められていません。

なにしろ、チベット人やウイグル人は、現下、自分たちの国の言葉を使うことも出来ないのですから。

つまり彼らは、中国語を話さなければなりません。

強制的に不妊手術をさせられた彼らは、自国民の人口を増やすことも出来ません。反対に彼らは、臓器販売の「畑」として容赦なく殺され、内臓を取り出され（＝収穫され）どんどん人口を減らされています。

そういった地獄絵図が、中国人が言うところの「自治」であるわけです。

私は、日本や日本人が、そのような状態になることを望みません。本音を言えば、中国を倒して、まだ生存している「自治区民」たちを助け出したいぐらいです。

しかし、いまの日本は、まったくもって「それ以前の問題」の状態にあります。政府（左翼となった自民党）、財務省、マスメディアが三位一体となって、すすんで中国に、私たちの日本を差し出そうとしているからです。

国防意識のスタンダードに

まずは、これを阻止しなければなりません。何とかして、政府と財務省とマスコミを無力化しなければなりません。

そのために必要な知恵を、私は「一九六九年のスイス人」から学びたいと考えています。最後まで、共産国ソ連に蹂躪されることがなかった、スイスの聡明な国民たちからです。

そのために皆さんにお見せするのが、上述した『民間防衛』からの抜粋文です。

日本では原書房から出版されているものですが、そこから、出来るだけ「現代の日本と直接重なり合う文章」だけを選びました。

そうして読みやすいように並びかえを行い、さらに原文の意味を生かしつつも、全体を私の言葉として書き改めました。原文は、改文のあとに追記してあります。

かくして上梓した本書を、私は日本国民の「国防意識のスタンダード」にしたいと考えています。

なんととっても『民間防衛』は、私たちにとり、同時代の人間が書いたものでも、同国の人間が書いたものでもありません。よって手前みそな部分は皆無であり、その客観的な意見には、そうとうに高い「普遍的価値」が含まれています。

それはつまり『民間防衛』が、誰にとっても説得力に富む「国防指南」たりえるということです。少なくとも、読者が純粋な日本人であるならば、間違いなくそうなりましょう。

第1章 自由と独立のために

スイスの誇り

私たちの国スイスは、他国征服の野望など一切抱いていない。我々が望んでいるのは、唯一、自国の平和だけである。

しかしながら、自分たちの平和を守り続けるためには、軍隊の武力によって、領土の安全を確保するしかない。悲しむべきことだが、それが世界を見まわしたときの現実なのである。

むろんスイスは、どの隣国の権利でも尊重する。だが、それと同等にスイスは、いかなる隣国によっても、自分たちの主権を踏みにじみられることを望まない。断じてそれを欲さない。

国民一人一人の自由も大事であろう。しかし、危険な時代にあっては、さきに共同体全体の自由があつてこそ、はじめて各個人の自由も確保される。よって、まず初めに守るべきは共同体の自由の方ということになる。

共同体の法は、国民全体を拘束する。それを嫌う者もいるだろう。だが、共同体の法は、我々の生活を守るものでもある。

そうであればこそ、選挙により、国民も法の制定に参加しなければならない。あなたが制度の改善のために何もせず、選挙にも参加しないというのであれば——あなたに、自分たちの制度に対する不平を言う資格はない。

原文

スイスは、征服の野心をいささかも抱いていない。何国をも攻撃しようとは思っていない。望んでいるのは、平和である。

しかしながら、世界の現状では、平和を守り続けるためには、軍隊によって自国の安全を確保するほかないと、スイスは信ずる。

スイスは、どの隣国の権利も尊重する。しかし、隣国によって踏みにじみられることは断じて欲しない。

共同体全体の自由があつて、初めて各個人の自由がある。われわれが守るべきはこのことである。

法は、われわれすべてを拘束するが、われわれを守るものでもある。われわれも法の制定に参加せねばならない。もし、制度の改善のために何もせず、共同体の管理に参加しないならば、自分たちの制度について不平を言う資格はない。

国防の意識

自由と独立、この二つは、我々の財産のなかにあつて、最も尊いものである。そして、この自由と独立は、断じて他者から与えられるものではない。どちらも、自分たちで獲得しなければならぬものである。まことに自由と独立は、絶えず努力して守らなければ、すぐに喪失してしまう権利である。また、それは言葉や抗議だけで守り通せる安易なものでもない。それらは手に武器をとって要求して、初めてこの手に得られるものである。

現状にあつては、危険はつねに潜在している。国家同士の恐怖心のうえに保たれている均衡は、十分な安全を保障してはくれない。

ややもすると私たちは「恒久平和」などというものを信じたがつてしまう。だが実際には、そこに向かって世界が進んでいると示してくれるものは何もない。

ここから出てくる結論は次のとおりだ。すなわち、自国の安全保障は、私たちの軍隊の能力と、民間の防衛意識によって、大きく左右されてしまうということである。

原文

自由と独立は、われわれの財産の中で最も尊いものである。——自由と独立は、断じて、与えられるものではない。

自由と独立は、絶えず守らねばならない権利であり、ことばや抗議だけでは決して守り得ないものである。手に武器を持って要求して、初めて得られるものである。

危機は潜在している。恐怖の上に保たれている均衡は、十分に安全を保障してはいない。とかく恒久平和を信じたものだが、それに向かって進んでいると示してくれるものはない。

こうして出てくる結論は、わが国の安全保障は、われわれ軍民の国防努力いかんによって左右されるということである。

第2章 目に見えない戦争

戦争の第二のかたち

武器による戦争は、それを開始した陣営にも被害を与えずにはおかない。そのため私たちの敵が「武力闘争とは別の手段」を選択することも大いにあり得る。

極言すればこうだ。「核兵器の使用によって、砂漠のように荒廃してしまった国を手に入れるよりも、いまだ物資が保存されている国を手に入れるほうが、よほど得策なのではあるまいか」という。

そこで戦争は、自然な流れとして「心理戦」の形態を取ることになる。つまり、誘惑から脅迫にいたる、あらゆる種類の圧力を駆使して、最終的には、相手国の抵抗意識を骨抜きにしておこうというのである。

そのために必要な情報インフラも、現代文明では十分に機能している。すなわち、現代においては、宣伝の技術や手段は、驚くほどの発達を遂げているということだ。そのため敵の唆しは、あらゆる形で、わが国へ浸透することが可能となっている。

もう一度言おう。戦争は武器だけで戦われるものではなくなった。戦争は心理的なものになった。それゆえ陰険で周到な宣伝は、実戦のずっと以前から、私たち国民の意志を挫くことが出来る。

これは極めて重大な問題である。だってそうではないか。精神が挫けてしまったならば、我々に腕力が残っていたとしても、それが一体なんの役に立つというのだろうか。

このような事態が、戦争の第二の形であり、目に見えない戦争とも呼ぶべきものである。

同朋たちよ、この「目に見えない戦争」を舐めてかかってはならない。いや、それが目に見えないものであり、偽装されているものであるならば、我々にとって、いっそう危険なものと心得るべきである。

まずもって、それは国外からやってきたように見えない。まるで国内発であるかのようなカムフラージュされて、こっそりと国民の心に忍び込んでくる。そして、いつの間にかに、我々のあらゆる制度、あらゆる生活様式をひっくり返してしまうのである。

かような敵のやり方は、最初は誰にも不安を起こさせない。それぐらい注意ぶかく、息を潜めて侵攻してくる。そこに血なま臭さはないし、多くの場合、暴力を用いないで目的に達する。

この密やかな侵攻に対して、我々は細心の注意を払う必要がある。そう、我々は絶えず警戒を怠ってはならないのだ。

この種類の戦争に勝つ道は、武器や軍隊の勇ましさのうちにはない。むしろ、我々の道徳的な力や、継続する抵抗の意志のなかにこそある。

原文

近代の破壊的戦争は、それを開始した者にも被害を与えずにおかない。だからわれわれの敵が別の手段を選ぼうとすることもあり得るのだ。

核戦争によって砂漠のように荒廃した国を手に入れるよりも、物資が充分供給されている国に手をつけるほうが、得策ではないだろうか。そこで、戦争は、心理戦の形態をとるようになり、誘惑から脅迫に至る、あらゆる種類の圧力を並べ立てて、最終的には、国民の抵抗意志を崩してしまおうとする。現代においては、宣伝の技術や手段はきわめて発達しているので、あらゆる形での他国に対する浸透が可能である。

戦争は武器だけで行われるものではなくなりました。戦争は心理的なものになりました。作戦実施のずっと以前から行われる陰険で周到な宣伝は、国民の意志をくじくことができます。精神—心がくじけたときに、腕力があつたとて何の役に立つでしょうか。

このような、戦争の第二の形、つまり目に見えない戦争。

戦争のもう一つの様相は、それが目に見えないものであり、偽装されているものであるだけに、いつも危険である。また、それは国外から来るようには見えない。カムフラージュされて、さまざまの姿で、こっそりと国の中に忍び込んでくるのである。そして、われわれのあらゆる制度、あらゆる生活様式をひっくり返そうとする。

このやり方は、最初はだれにも不安を起こさせないように、注意深く前進してくる。その勝利は血なまぐさくはない。そして、多くの場合、暴力を用いないで目的を達する。これに対しても、また、しっかりと身を守ることが必要である。

われわれは絶えず警戒を怠ってはならない。この方法による戦争に勝つ道は、武器や軍隊の力によってではなく、われわれの道徳的な力、抵抗の意志によるほかない。

不景気の背景

確認しておくが、端的に言って、私たちが直面しているのは、武器を使って戦う戦争ではない。

それだから感覚的に分かりづらいが、それでも今、戦争は厳然として行われているのである。直接的な破壊行為が少なく見えるからといって、その恐るべき効果は軽視してはならない

国民諸君よ、われらが自由と独立を守るために、合法的なあらゆる手段を使って、見えない敵と戦え！

敵は言う。もっとも経済効率の高い戦法、つまり安上がりの戦法は、常に、あらゆる手段でもって、対象となる国の経済的沈滞を招くことであると。

つまり肝要なのは、対象国を不景気に陥れることなのである。腹がへっている者は、結局、パンの提供を約束する者に尾を振るものだからだ。

そのとき、わが国の経済事情はますます悪化し、国外からの政治的圧力はますます高まることになる。

経済的な防衛としては、食料、原料、エネルギーの供給源を、独自に確保すること。わが国が、特定の外国や、外国のグループに「経済的に依存せざるを得ないような事態」を招かないことが何より重要である。

原文

端的に言って、われわれの直面しているのは、武器をもって戦う戦争ではない。

しかしながら、今日、一種の戦争は厳として行われている。それは、武器による戦争に比して直接的破壊が少なく見えるからといって、その恐るべき効果は軽視できない。

われらの自由と独立を守るため、合法的なあらゆる手段を使って戦え！

最も経済効率の高い戦法、つまり、最も安上がりのやり方は、常に、あらゆる方法で、その国を経済的

沈滞——不景気に陥れることである。腹のへった者は、パンを約束する者の言うことを聞くのだから。

わが国の経済事情はますます悪化し国外からの政治的圧力が高まる。

経済的な防衛では、食料、原料、エネルギー源の供給を確保して、わが国が、特定の外国や、外国のグループに、経済的に依存せざるを得ないような事態になることを防ぐ。

敵の耳目

敵は言う。

——たとえば「魅力」によっても、費用のかからぬ方法で、対象国を滅ぼすことが出来る。「魅力」で相手を惹きつける宣伝は、我らの手中にある。それは実に効果的な武器である。

この武器を使うため、我々は、自分たちが意図することを、見目美しい粉飾で隠さなくてはならない。そのさい文化は、立派な隠れみものとして利用することができる。

臆することは無い。我々の餌食となる国の国民は、もともと愚かで退廃的だからだ。よって彼らは、我々の企ての為すがままとなるだろう。我々が彼らに何かを与えるフリをすれば、それだけで彼らは、いい気持になってしまうかもしれない。

はじめのうちは、せめて私たちの「政治的思想」だけには、傾倒すまいと努力するかもしれない。しかし柔弱な精神にとっては、洗脳の完遂は、時間の問題でしかないのだ。彼らは次第に、私たちの精神に犯されていくだろう。

かくして我々は、彼らの心を捕えていく。彼らは甘美なワナに陥り、我々は彼らに首輪をかけることになる——

敵国は、そのようになった我々を注視している。我々の一挙手一投足が、驚くほど注意ぶかく見守られている。かの見えない戦争の危険に、私たちがどのように対処するか、どのように持ちこたえていくか、敵はそれを、さも陰険な眼差しで見守っているのだ。

その「状態」を見極めたうえで敵は、我々に繰り出す、次なる攻撃のタイミングを考慮する。この「次なる攻撃」は、武器による侵攻となるかもしれない。

原文

武器による戦いに比べ費用のかからぬやり方で、敵を滅ぼすことができるのだ。「魅力」で魅きつける宣伝は、われわれの手の中にある効果的な武器だ。われわれは、われわれの意図するところを、美しい粉飾で包み隠さなくてはならない。文化は立派な隠れみのに利用できる。

彼らは愚かで退廃的だから、われわれの企てのなすがままになるだろう。われわれが彼らに与えるフリをすれば、いい気持ちになってしまおう。彼らは、われわれの政治的思想は信じまいとするが、だんだんそれに侵されていくだろう。このようにして、われわれは、彼らの心をとらえていく。彼らはワナに陥り、われわれは、彼らの首を絞めつける輪をかけるのだ……

外国はわれわれを注目している。われわれの一挙手一投足が注意深く見守られている。戦争の危険にわれわれがどのように対処するか、どのように持ちこたえていくかを見て、敵はわれわれに攻撃するかどうかをきめる。

第3章

敗北主義と平和主義

平和という口実

ある国を、内部から崩壊させるための活動——それは、スパイの潜入により、新秩序のイデオロギーを信奉する者たちの「秘密地下組織」をつくることから始まる。

この地下組織は、第一の目標として、最も活動的で、かつ最も危険なメンバーを、対象国の政治上層部に送り込もうとする。うまくすれば彼は、影の政治的支配者となるだろうからだ。

いわゆる「革新者」や「進歩主義者」は、この影の支配者の使い走りとなって、民衆支配に利用されることになる。

この使い勝手のよい道具的人間は、社会生活の具体的問題には不慣れな「知識階級」の中から、引き抜かれることが多い。彼らは新奇なものを好むので、いわゆる革新思想と相性がいいのである。

それだから、ジャーナリスト、作家、教授（＝知識階級）たちを引き込むことは、秘密組織にとって、たいへん重要なことである。

この結果として、数多くの組織が、巧みに偽装した上で、正義、福祉の追求、平和といった口実のもと、いわゆる新秩序の思想（＝左翼思想）を宣伝してゆく。

彼らは、すべての社会的不平等に終止符を打つとか、世界を地上の楽園に変えるとか、文化的な仕事を重んじるとか、そういった美辞麗句を並び立てる。こうした美辞麗句は、まことに知識階級の耳に入りやすい名文句だと言えるだろう。

いや、知識階級ばかりではない。不満な者、欺かれた者、弱い者、理解されない者、落伍した者、こうした人たちは皆、右のような美辞麗句を喜んで受け入れるに違いない。

あまつさえ、右のような言説は、せっかちに黄金時代を求める若者に対しては、特に効果的であり、影響力もまた非常に強いものを持っている。

実際問題、軍事作戦を開始する、ずっと前の平和な時代から、敵は、あらゆる手段を使って、我々の抵抗力を削ろうとしてくるのである。

典型的な手法としては、陰険巧妙な宣伝で私たちの心に疑念を植えつける、民意の分裂を図る、彼らのイデオロギーによって我々の心を捉えようとする、といったことがある。マスメディア——新聞、ラジオ、テレビは、私たちの強固な志操をも、なし崩しにすることが出来る。

こうして、知らず知らずのうちに、驚くほど巧妙な宣伝が行われることになる。

私たちは、決してこれに騙されてはならない。

たしかに「戦争放棄」とか「差別撤廃」といった素朴な人道主義に身を任せることは、私たちにとり、実に容易で気持ちのよいことである。しかし、偽物の寛容に身を任せると、早晚、悲劇的な結末を招くことになる。

我々はあくまでも、敵の「真の意図」を見抜かなければならないのだ。

原文

国を内部から崩壊させるための活動は、スパイと新秩序のイデオロギーを信奉する者の秘密地下組織をつくることから始まる。この地下組織は、最も活動的で、かつ、危険なメンバーを、国の政治上層部に潜り込ませようとするのである。

彼らの餌食となって利用される「革新者」や「進歩主義者」なるものは、新しいものを待つ構えだけはあるが社会生活の具体的問題の解決には不慣れな知識階級の中から、目をつけられて引き入れられることが、よくあるものだということを忘れてはならない。

数多くの組織が、巧みに偽装して、社会的進歩とか、正義、すべての人人の福祉の追求、平和というような口実のもとに、いわゆる「新秩序」の思想を少しずつ宣伝していく。

この「新秩序」は、すべての社会的不平等に終止符を打つとか、世界を地上の楽園に変えるとか、文化的な仕事を重んじるとか、知識階級の耳に入りやすい美辞麗句を用いて……

不満な者、欺かれた者、弱い者、理解されない者、落伍した者、こういう人たちは、すべて、このような美しいことばが気に入るに違いない。

ジャーナリスト、作家、教授たちを引き入れることは、秘密組織にとって重要なことである。彼らの言動は、せっかちに黄金時代を夢みる青年たちに対して、特に効果的であり、影響力が強いから。

軍事作戦を開始するずっと前の平和な時代から、敵は、あらゆる手段を使ってわれわれの抵抗力を弱める努力をするであろう。

敵の使う手段としては、陰険巧妙な宣伝でわれわれの心の中に疑惑を植えつける、われわれの分裂をはかる、彼らのイデオロギーでわれわれの心をとらえようとする、などがある。新聞、ラジオ、テレビは、われわれの強固な志操を崩すことができる。

こうして、最も巧妙な宣伝が行われる。これにだまされてはならない。

素朴な人道主義に身をまかせることは、あまりにも容易なことである。偽せものの寛容に身をあやまると、悲劇的な結末を招くであろう。敵の真の意図を見抜かねばならない。

抵抗力の削減

敵は、手段を尽くして我々を弱体化させようとする。そのために「本格的な武力戦争が始まるまで待つ」などということは絶対にしない。スパイ行為は、すでに第一級の武器であり、その収穫も極めて大きいからだ。

気づけば敵は、私たちについて充分すぎるほどの情報を持っている。その情報に基づいた、彼らの広範囲な妨害工作は——たとえステルス化していようと——国民の士気を著しく衰えさせることが出来る。と同時に、国の正常な社会インフラの機能をも、甚大に麻痺させることが出来る。

考えてみれば簡単な理屈だ。国民に戦うことを諦めさせることが出来れば、敵は、ごく簡単に「抵抗力」を打ち破ることが出来るのである。このことは、巧妙な宣伝工作を駆使すれば、たしかに現実のものとなるのである。

いまも敵は、我々の心のなかの抵抗力を挫くための策謀を重ねている。何となれば、私たちに偽りの期待を与えてまで欺こうとしている。

私たちの批判精神、判断力は、きびしい試練に晒されている。今こそ私たちは、自分たちを取り巻く偽善の網のなかから、絶えず「真実」を探し出さなければならぬ。

原文

敵はあらゆる手段を使ってわれわれを弱めようとしており、そのために戦争が始まるまで待つようなことはしない。スパイ行為は第一の武器であり、収穫も大きい。敵はわれわれについて充分すぎるほどの情報を持っている。大仕かけに行われる妨害工作は、国民の士気を衰えさせると同時に、国の正常な活動を麻痺させることができる。

国民をして戦うことをあきらめさせれば、その抵抗を打ち破ることができる。

このことは、巧妙な宣伝の結果、可能となるのである。

敵は、われわれの内部における抵抗力を挫折させるための努力をしている。わが国民に偽りの期待を

与えて欺こうとしている。

われわれの批判精神、判断力は、きびしい試練にさらされている。われわれを取り巻く偽りの網の中から、絶え間なく真実を選び出さなければならぬ。

戦う前からの敗北

敗北主義——それは猫なで声で、人間の最も崇高な「愛」の感情に訴える。

彼らは宣する。諸民族の協力、世界平和への献身、優しい秩序の確立、相互扶助の実現を。彼らは呪う。戦争の野蛮、破壊の悲惨、殺戮のおぞましさを。

そして、その最終的な結論は「時代おくれの防衛思想は放棄してしまおう」である。

それを励ますかのように、新聞は「崇高な人道的感情によって勇気づけられた」と口にする少女を讃えて記事にする（八月六日のテレビでよく流される）。

学校は、諸民族とのあいだの友情の重要性を生徒に教えこむ。差別などもってのほかであると教えこむ（道徳の教科書の主調である）。

選挙カーは、まるでキリスト教徒であるかのような愛を喧伝する。右の頬をぶたれたら、左の頬をも差し出せと。抵抗などしてはならないと（憲法九条を守れ）。

だが騙されてはならない。こうした宣伝は、人の尊厳きわまる感情をも利用して、最も陰險な意図（＝侵略）のために役立たせるものなのである。

学者たちは、あらゆる努力は無駄なのだ、私たちに信じ込ませようとしている。敵の強大な軍事力のまえには、彼らに平服して慈悲を求める以外、道はないのだと。

しかし恐怖心に負けてはならない。我々は「ノー」と言い続けよう。我々は、最後の最後まで、みずからこの国の主人であり続けよう。

精神的な防衛においては、敵のイデオロギーに対抗するため、国中に、正しい情報を行き渡らせる必要がある。独立の意志を弱めようとする宣伝攻勢には、それに対抗するような勇気的内容を発信しなければならぬ。

原文

敗北主義——それは猫なで声で最も崇高な感情に訴える。——諸民族の間の協力、世界平和への献身、愛のある秩序の確立、相互扶助——戦争、破壊、殺戮の恐怖……

そしてその結論は、時代おくれの軍事防衛は放棄しよう、ということになる。

新聞は、崇高な人道的感情によって勇気づけられた記事を書き立てる。

学校は、諸民族との間の友情の重んずべきことを教える。

教会は、福音書の慈愛を説く。

この宣伝は、最も尊ぶべき心の動きをも利用して、最も陰險な意図のために役立たせる。

もはや恐怖に負けてはならない。学者たちは、あらゆる努力は無駄だとわれわれに信じ込ませようとしている。研究所が引き出した恐るべき破壊力を前にしては大声で恵みを求める以外にないと彼らは言う。しかし、ノーである。われわれは最後までみずからの主人であり続けよう。

精神的な防衛においては、われわれの独立の意志を弱めようとする外国のイデオロギーの宣伝攻勢に抵抗できるようにするために、正しい情報を国民に提供するように心がける。

騙されるな！

我々は知らなければならない。善意がつねに有益であるとは限らないことを。理性は感傷主義に打ち勝たなければならないことを。

敵は言う。

「我々に味方すれば、君らは、何の不自由もない生活を送れるようになるだろう。我々は、そのような助力を怠らないだろう」

「我々と同盟を結べば、その日から、君たちの生活は大きく改善されるだろう」

そのように優しい気な笑顔で言ってくる。しかし、そこで私たちが逡巡しているのを見ると、

「君たちが我々の申し入れを黙殺するならば、君たちの国には、最悪の災難が降りかかるだろう」と脅迫してくるのである。これが全体主義国家のやり口である。

右のような甘い唆しは、わが国の国家制度を内部からつき崩し、新しい、彼らの望むような政治体制を樹立させるための企てである。

だがそれに騙されてはならない。

歴史的に見れば、彼らの唱える政治体制が樹立された国では、どこでも、あらゆる形の自由が奪われている。そこでは新しい特権階級が生れ、その特権階級が、またしても世界の平和を危機に陥れることになるのだ。

そして、かつて侵略された側の人間は、決してこの特権階級の側には入れてもらえない。

原文

善意が常に有益であるとは限らないこと、理性は感傷主義に打ち勝たなければならないこと。

われわれが全体主義国に味方すれば、彼らは何の不自由もないようにわれわれを助けてくれるだろうといったり、またわれわれが同盟を結べば、その日からわれわれの状態は改善されるだろうと約束したり、そうかと思うと、もしも、われわれが先方の申し入れを黙殺すれば、最悪の災難がふりかかるだろうと脅迫したりする。

これはわが国の国家制度を内部から崩し、新しい政治体制の樹立を目標とする企てであるが、彼らの唱える政治体制が樹立された国では、どこでもあらゆる形の自由がなくなり、新特権階級が生れ、また、世界の平和を絶えず危うくする。

第4章 忍び寄るスパイ

スパイの本性

政府は国民の社会生活を守らなければならない。したがって政府は、特にスパイ行為と戦う義務を持っている。

我々の防衛力を弱めるような発言を憚らない連中は、つねに監視しなければならない。この連中こそが、スパイ行為によって、内部から国を崩壊させようとする者たちだ。こいつらは、我々の公共精神を麻痺させようと躍起になっている。

自由主義国の「自由」とは、まことに良い言葉だ。だが自由と無秩序は全く別のものである。

ゆえに、国家独立の意志を弱体化させることで、無秩序な社会をもたらそうとするスパイを、政府は決して受容してはならない。人物だけでなく、そのイデオロギーに対しても、人々の注意を喚起する必要がある。

スパイおよび、その走狗となった情報機関は、共同して、軍隊の価値に対する疑念を広めようとする（朝日新聞！）。そのため軍隊は、やむことのない攻撃の目標となる。

左翼は平和を訴えるが、その主張手段は、まったくもって攻撃的なものである。こうした「平和のための戦い」は、全国に、混乱、恐慌、無秩序をまき散らす。

原文

国家は共同社会を守らなくてはならない。そのため、国家は、特にスパイ行為と戦う義務を持つ。

われわれの防衛力を弱めようとする連中は、監視しなければならない。内部から国を崩壊させようとする作業が、公共精神を麻痺させる者によって企てられる可能性が常にある。

自由はよい。だからといって、無秩序はいけない。

故に、国家的独立の意志をなくしてわれわれを弱体化させようとするイデオロギーに対して、人々の注意を喚起する必要がある。

スパイおよび情報機関は、共同して、軍隊の価値に対する疑念の念を広めようとする。そして、軍部は、やむことのない攻撃の目標となるのである。

彼らの「平和のための戦い」は、全国に、混乱、恐慌、無秩序をまき散らす。

注意喚起

国家の独立を主張する者たちは、報道機関全体を批判している。すなわち「国民に迫っている種々の危険に対して余りに無関心である」として。

報道機関は、人道的見地から「我々は難民を養い、彼らに宿泊施設を提供する義務を持っている」と主張している。

しかし、その難民の中には、その行動を監視しなければならない「疑わしい客」も混じっているのだ。ゆえに難民を受け入れることによって、私たちは、いつかその「難民」から脅迫を受けるようになるかもしれない。

さらに、政治的難民を受け入れたこと自体に対しても、その本国政府から「我々に対する裏切り行為だ」という強硬な抗議（＝武器攻撃）を受けるかもしれない。

我々の敵になるかもしれない国に、私たちにとつての必需品の供給を独占させること。これは絶対に避けなくてはならない。

原文

国民に迫っている種々の危険に対してあまりに無関心であるとして、報道機関全体を批判している。

人道的見地から、われわれは、これらの人々（難民）を養い、宿泊施設を提供する義務があるが、その中には、その行動を監視せねばならない疑わしい客もまじっている。……さらに、政治的難民を受け入れたことについて、われわれは脅迫されるかもしれない。

われわれの攻撃者となるかもしれない国に、われわれが必要とするものの供給を独占させることは、どうしても避けなくてはならない。

メディアの危険性

敵が言う。

「我々は、かの国の与党の党首に〇〇氏を据えた。彼は野心に取りつかれ、非常に金を欲しがっている男だ。

彼が属している保守党は、〇〇氏に微かな希望しか与えなかったらしい。そこで彼は、控えの間で自分の出番を待つよりも、性急で危険な道を進むことを選んだのだ。すなわち我々の傀儡になるという道。彼は、かつての仲間からは決定的に排斥されてしまったので、今となっては、成功するためには何でもやるだろう。つまり同党の議員からの批判も受け入れないということだ。それに伴って、我々の活動のほうは順調に進んでいくことだろう」

心理戦争の段階にあっては、新聞、出版物、ラジオおよびテレビは、まさに決定的な役割を果たすことになる。

そのため敵は、編集部門の主要なポストに、自国のスパイを食い込ませようとする。我々国民は、これに対する警戒を怠ってはならない。敵国を擁護する新聞、国外から来た曲者を擁護するような新聞は、毛ほども相手にしてはならない。

私たちは、防衛意欲を害するあらゆる宣伝に対して、徹底した抗議活動を行うようにしよう。

敵は言う。

「我々は、我らのイデオロギーに同調する新聞記者を、相当な規模で利用する。それらの記者の中には、われわれの党是に、心の底から心酔する者さえ現れよう。

そうなるのも遠くない。我々のスパイたちは、最も重要な新聞社から、二流新聞の編集局に至るまで、取りこぼしが無いほど全般的に入り込んでいるのだから」

混乱と敗北主義を煽る者たちは、即刻逮捕すべきである。また、敵の宣伝のために身を売った新聞は、ただちに発行を差し止めるべきである。

侵略者のために有利となることを行った者は、その程度のいかんを問わず、裏切り者として、国の裁判にかけなければならない。

原文

われわれは党の党首に丁氏を据えた。彼は頭脳明晰、かつ、活動家であるが、野心に取りつかれ、非常に金を欲しがっている。

彼の属していた保守党は、彼に微かな希望しか与えなかったので、じっと控室で自分の出番を待つ代わりに、彼はついに性急な道を選んだのだ。彼は、仲間からは決定的に排斥されてしまったので、今や、成功するためならどんなことでもするだろう。それ故、われわれの活動は順調に進んでいる。

新聞、出版物、ラジオおよびテレビは、このような心理戦争の段階においては、まさに決定的な役割を果たすものである。そのため敵は、編集部門の主要な個所に食い込もうとする。われわれ国民はこれに警戒を怠ってはならない。敵を擁護する新聞、国外から来た者を擁護する新聞は、相手にはならない。われわれは、われわれの防衛意欲を害するあらゆる宣伝に対して抗議しよう。

われわれは、われわれと同調する相当数の新聞記者を利用する。その記者の中には、われわれがつくった文書を信ずる者も出てくるだろう。われわれの組織の中の相当数者は、最も重要な新聞社から二流新聞の編集局にまで入り込んでいる。

混乱と敗北主義の挑発者どもは逮捕するべきであり、敵側の宣伝のために身を売った新聞は発行を差し止めるべきである。侵略者のために有利なることを行った者は、その程度のいかんを問わず、裏切者として、裁判にかけなければならない。

持つべき気構え

武器を手取ることは、国民の義務としては、その第一番目に来るものではない。

同じ戦うにしても、第一の段階は「精神的な戦い」である。

外敵から国を守るため、および国内の秩序を保つため、我々は、岩のように固い意志を持たなければならない。その意志が頑強である時にのみ、我々は、敵からの攻撃に持ちこたえることが出来るのであるから。

実は敵からの侵攻にもプラスの面がある。

というのは、危険が目前に迫ったことにより、これまでどっち付かずの態度でいた者も、いまや自分の

立場を、明確にする必要に迫られることになるのだ。それにより国民の精神的連帯感、刻一刻と「一致団結」の状態へと近づいていく。

また近隣国で起こる悲劇——外国の侵略軍を、自ら招き入れた者たちの悲劇——を目前にした場合、これまで政治的に盲目だった国民たちも、ついに現実の政治を直視せざるを得なくなるのである。

私たちは最悪の状態を考察してきた。むろん、このような事態に立ち至ることは、絶対に回避しなければならぬ。しかし、そうして回避するためには、私たちはどうしても「最悪の場合」を想定しておく必要があるのだ。

原文

国民の義務とは、武器を用いることが第一なのではなく、まず、その精神が問題である。外敵から国を守るため、および国内の秩序を保つための、岩のように固い意志を持つ必要がある、その意志が強固であるときにのみ、われわれは持ちこたえることができるのである。

危険が目前に迫ったことよって、これまでどっちつかずの態度でいた者は、はっきりした態度をとらざるを得ないことになり、また、スイス国民の精神的連帯感も刻一刻と強まっていくのである。

近隣国に起こっている悲劇、すなわち、その国を支配し、その国の自由と独立の伝統をすべて破壊しつくす外国の侵略軍を、みずから招き入れた国の悲劇を目の前にして、これまで最も盲目的であったものも今や事態にめざめるのである。

このような場合を避けなければならないが、そのためには、最悪の場合を想定しておく必要があるのだ。

おわりに

民間防衛と日本の現在

敵とは中国のこと

如何だったろう。読者にあつては、まるで一九六九年のスイスと、現代の日本が「完全に同一の世界」として、重なり合ったような気がしたのであるまいか。

事実、民間防衛の「敵」という言葉を「中国」に変えれば、それは、そのまま日本の時事問題に成り代わってしまう。

まずは左翼化した自民党を見てみよう。その自民党の中枢に鎮座する人間は、すでに「実質的な中国人」になっている。石破総理や、岩谷外務大臣が、中国からの帰化人である可能性はかなり高い。

そうでなかったとしても、彼らは、精神的には、全く日本人ではなくなってしまっている。むしろ、日本人でないその精神は、中国人のそれに他ならない。

政府を裏から操っている財務省も、また然りだ。この伏魔殿に務める職員は、同僚に次のように語ったという。

「我々が中国に便宜を図るのは、二十年後には、日本は中国になっているからだ。そのときの『中国』で少しでも高いポジションに就くために、いま私たちは準備活動を行っているのだ」

こうした思惑が、重税によって日本人から資産を吸い取り、それを中国に送金するという、現在の金融システムを作っている。もっとも、この送金は、直に見える体裁のものではなく、何重にもカムフラージュされている形での「送金」である。

この「送金」のため、日本は三十年ものあいだ経済発展ができず、逆に中国は、三十年のあいだ経済発展を続けた。それを思うと『民間防衛』の次の箇所は、あまりにも真実としての重みがある。

「最も経済効率の高い戦法、つまり、最も安あがりのやり方は、常に、あらゆる方法で、その国を経済的沈滞——不景気に陥れることである。腹のへった者は、パンを約束する者の言うことを聞くのだから。

わが国の経済事情はますます悪化し国外からの政治的圧力が高まる」

さらに日本には、このような状況を、巧みな情報操作によって醸成してきた「マスコミ」が巣くっている。彼らの中枢が、中国人のスパイであることは、今では疑いようもない。それは『民間防衛』の指摘からしても当然の帰結であろう。

それを証明するように、NHKラジオの国際放送では、中国籍の男が「尖閣諸島は中国の領土」「南京大虐殺を忘れるな」とアナウンスした。私たちは、このような中国放送局に受信料を払っているのである。

売国を防ぐために

左翼政党、財務省、マスコミ——私はこの三つを、日本の三大巨悪であると言ったことがある。そして現在、この三大巨悪が、かつてない勢いで日本を中国で売り渡そうとしている。

それを阻むものがあるとすれば、七月の参議院議員選挙の投票結果だけだろう。よって、この選挙は、日本国民にとっての分水嶺となる。

それだけに国民には、この選挙における「無投票」の罪深さを知ってほしい。

ここで選挙に行かないことは、実質「自民党による中国への売国」に手を貸すのと一緒のことである。なにしろ自民党は、わざわざ投票日を、連休の中日という「国民が投票に行きづらい日」に設定したぐらいなのだから。

投票数が減ったとき、モノを言うのは、安定した自公の組織票である。その組織票を覆すとすれば、どうしても国民の一人一人が「自公民に反対する野党」に投票し、その得票数を上げるしかないのだ。

たとえば埼玉市の市長選挙では、投票率三六パーセントという低さのゆえに、自公民が推す現職が再選されてしまった。組織票が効いたということだ。

それだけに、この投票率の低さは、ほとんど万死に値する。埼玉は、とくに外国人問題で揺れている県であるというのに！

この結果として、埼玉県人は、これからも外国人による悪夢（迷惑行為や侵略行為）のなかを歩き続けるだろう。それは彼らの「政治への無関心」が招き寄せた結果である。

参議院選挙では、私も、もちろん投票に行く。

私が推すのは参政党だ。このマスコミに報道されることのない政党が、これからの日本を変えてくれるものと信じたい。彼らの政策は、もちろん『民間防衛』のイデオロギとも合致しているものだ。

国家防衛のために

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
